

中学校美術科における色彩と心の働きに着目した実践研究

— 授業実践と制作実践を通して —

木内 茜里
教科領域コース

1. はじめに

本報告書では、教育実践とそれを踏まえた自身の制作について、色彩に着目して述べていく。実践を通して美術科の授業や、自分自身の絵画制作の中でも、色彩がもたらす効果は大きいと捉えた。中学校美術科における授業実践においても、また自身の作品制作実践についても検討し、中学校美術科教育における「色彩」の指導について、「心の働き」の面と共に考察する。

2. なぜ「色彩」に着目するのか

色彩を取り上げることとした理由は、特に色彩と心の働きには密接な関係があり、色彩の知識と自身の経験から、美術科の学びを深めることができると考えるからだ。例えば、内閣府認定 公益社団法人 色彩検定協会（以下、色彩検定協会）（2019, p.47）によると、「ブライト」というトーンでは健康的、陽気、華やかな印象を与えると述べられている。このことから、色彩は心の働きに関係していることは明らかである。また、実際にこのような人々の共通した色彩への感覚は、絵画の制作や鑑賞の中で役立つ視点であると考え。絵画の表現活動における色彩として、筆者が特に着目したのは「記憶色」という色の特性である。「このように、熟知した物体の色は、実際よりもその色らしさがより強調されて記憶される傾向があります。」（色彩検定協会, 2020）とある。加えて、「記憶色では好ましいと思う方向に変化して記憶されることも多くあります。」（色彩検定協会, 2020）とある。ここでは、無意識のうちに記憶している色と現実の色が離れてしまうことを示している。「そのため、写真や印刷物、テレビなどでは、記憶色も踏まえた色再現や色調補正が行われています。」（色彩検定協会, 2020）ということも踏まえ、自分自身の記憶色は現実の色とは変化していることを理解した上で、絵画表現を模索していくことが必要であると考えた。また、記憶色の特性を利用することで、熟知した物やことを強調して描く事ができるのではないかと考えた。

実習の観察の中で気づいたことについて述べる。私は、教育実践の実習の中で何度も色について生徒に質問されることがあった。生徒の中には、既習事項であっても、実際に制作の中で使う方法が理解できていない様子も見られた。考える手助けをする事で、生徒自身で色を選ぶことができた。筆者も、制作の中で色に悩むことがある。その際に、イメージにあった色を見つけるために、理論を学び考えることもある。生徒自身で自分の表現したいことにふさわしい色を探すことで、美術科における絵画表現での学びを深めることができると考えた。このことから本研究では、色彩を軸に授業実践と制作実践を行う。

3. 研究の流れについて

まず、1年次には鑑賞の授業実践を行った。2年次には表現の授業実践を行った。中学1年生に向けた色彩の知識と表現についての授業実践を行った。そして2年次後期には自身の油彩による絵画表現の実践を行った。鑑賞、表現の授業及び制作を行うことで、それぞれの場面での色彩と心の働きに着目した課題を見つけ、考察することとした。

4. 鑑賞と表現の授業実践

(1) 鑑賞の授業実践

1年次の実践では、色彩に着目した絵画の鑑賞の授業を行った。ここでは、色彩の特徴を捉えることのできる作品であるアンドレ・ドランの《チャリング・クロス橋》を取り上げ、現実とは異なる色彩を使った作品の色彩描写の工夫について学ぶことができる授業を展開した。ここでは、ワークシートへの生徒の回答（70人）をまとめた。色彩の客観的な事実について述べられている、かつ自分の考えを書いているものと、色彩の客観的な事実のみについての感想のみ述べているものに分け、整理した。その他の回答には、解説が難しいものや知識について述べられていないものを分類した。色彩の客観的な事実について述べられている、かつ自分の考えを書いている生徒は16人、色彩の客観的な事実のみについての感想のみ書いている生徒は50人であった。この結果から、多くの生徒は色彩についての知識を理解したことが分かった。しかしながら、ワークシートの結果からは、鑑賞を通じて自分の考えを持てているのかは、多くの生徒で不明であるという結果になったと考察する。多くの生徒が、この絵画の鑑賞において色彩の知識を学ぶことができているという結果であったことから、鑑賞を通じて造形の要素である色彩に着目することで、造形的な視点を深めることができたのではないかと考えた。同じ授業でも、理解度の差が生まれてしまっていることから誰もが目標を達成することができるよう知識とそれを使うことで見方を深めることのできる指導を行う必要があると分かった。

(2) 表現の授業実践

2年次の実践では、中学1年生に色彩についての知識の学習と絵の具の使い方の授業実践を3時間で行った。ここでは、色彩の基本の知識とアクリル絵の具の使い方について学習した。まず、1時間目の授業として、三原色等の基本的な色彩の知識について幅広く学び、絵の具での混色の注意点についても理解を深めた。2時間目の授業では、絵の具の使い方について学習する内容とした。加えて、色の伝える効果についても学ぶことができるよう、味覚を表現する色の組み合わせを考える活動も行った。3時間目の授業では、色彩を使った表現を深める活動を行った。表現に集中できるように、ここでは細長く切った画用紙を用意し、色を塗り、色カードを作った。生徒は作った様々な色カードの中から、表現したい感情に合った色を選び、組み合わせて表した。授業実践では混色を多く行うことで、色彩に対して心の働きを働かせることができたのではないかと考える。生徒のワークシートの「(4) 本日の活動で学んだこと、気づいたこと」では、「色の混ぜ方は色々あるが、明るい色がたくさん作れたので自分は今楽しい気持ちなのだなと感じた。(気づいた)」等の色彩に心の働きを見出していると考えられる回答をしている生徒もいた。加えて、手を動かし、活動したことで、気付きを得たと考えられる。「四色でも色々な色がつくれることにおどろいた。」といった生徒の回答もあった。色彩の造形的な気付きを得ることができ、心の働きと共に学びを深

めることができていないのではないかと考えられる。加えて、自分の心と感情を色彩と結びつけ考える等、心を働かせ取り組む様子も回答から見受けられた。これらにより、この授業実践では色彩と心の働きが行き来することとなり、中学校美術科の学びが深まったといえるのではないかと考察する。

5. 作品制作実践

生徒たちが絵画制作の授業の中で、身近なイラストレーションの色合い等の表現を取り入れようとする中で、筆者にとって表現したい主題とは何だろうかと思いをめぐらせた。実践と考察を通して、生徒にとっても、筆者自身の制作にとっても、描きたいものや主題に合わせ、心の働きにあった色を見つけることが必要であると考えた。まずは、色彩の知識や授業実践、制作実践を通して、さらに学びを深めることによって筆者自身の色合いを見つける手がかりにしていって。自分を問い直した際に、筆者にとってありふれた色というのは、幼い頃から見慣れたファンシー文具や雑貨等の作られた色であると考えた。しかし、今までの制作では筆者が慣れ親しんだファンシー文具や雑貨のような個性ある色彩の要素はほとんどなく、自分らしさというのが作品の中に欠けていると考えた。それでは、自己を表現する色彩として相応しくないと考えた。生徒を観察した際に、改めて自分らしい色は何だろうかと思いをめぐらせたことで、生徒だけではなく筆者にとっても、空想的な色が身近なものであったと再確認することができた。今回の制作実践では、モチーフや構図の選定だけではなく、色彩の構成について考え、作品制作に取り組んだ。

一つ目の作品《試作1》では、自分らしい世界観を表現するために、モチーフも色彩も全体的に現実とは乖離したものとなった。筆者自身が心惹かれる自然な色とモチーフを考え、全体を調和させることを目的として制作を行ったからである。そのため、画面全体でモチーフと色彩が馴染んでおり、心地良い作品になったと考える。一方で、猫を描いた作品《猫》ではモチーフの持つ固有色からやや離れた色彩ながらも、モチーフの形は現実に合わせて描いた。周りの風景に表したい世界観の要素を入れたことと、《試作1》よりも現実のモチーフを取り入れたことで、現実と空想の世界観が共存した作品となった。最終的な作品《金魚》(図1)では、これまでの試作から、自分が使っている色には共通点があると考えた。それ自体が、自分の個性であり表現したい世界観をそれのみでも表せると考え、色彩でファンシーな世界観を表そうと決めて制作した。ここで目指している「ファンシー」とは、現実の造形の要素を踏まえつつ、気まぐれで空想的な世界観のことを言う。その世界観を表すため、様々な色彩理論を活用し、最も色づかいに着目した作品にした。自己の絵画表現として考えた際には、現実のモチーフを借り、現実的なモチーフと空想的な色彩の差に着目させることで定義したファンシーな世界観を表現することが可能であると考えた。空想的な色づかい



図1. 《金魚》，制作年：2025年

画材：油彩・キャンバス

大きさ：910 mm x 727 mm

として可愛らしさや柔らかさを感じるような色を主に用いた。同じモチーフを描いたとしても、色の工夫だけで表現内容が変わってくるということを今回の作品制作実践を通して、再確認した。このようなことから、授業実践と作品制作を通して自分らしい色づかいというものを考え、色づかいによって作品をより自分らしく変化させる効果があったと考える。

6. 三つの実践の考察

三つの実践によって、色彩と心の働きを中心とした授業と制作で相互の色彩における課題を見つけ、解決していくことができるのではないかと考えた。今後は作品制作実践を踏まえた授業展開と制作の往還を行うことで、さらに造形の要素の色彩と心の働きに関する考察を深めることができるだろう。そこでは、制作の成果と考察を踏まえた指導を行っていくことが必要であると考え。

まず、鑑賞の授業実践では、色彩についての生徒の理解を確かめ、授業で深めると共に、指導案作りを通してフォーヴィスム等の特に色彩に着目できる絵画について理解を深めることができた。表現の授業実践では、生徒が色彩を意図的に使い制作することができるよう実践を行った。そこで、生徒の中には色彩に心を働かせていることが伺える回答も見ることができた。制作実践では、自分らしい色彩について見つけることができ、以前よりも色彩への理解を深めることができた。色彩の知識だけでなく、授業実践や観察で得た視点である、生徒はどのようなところから着想を得ているのかということを手掛かりとして、筆者自身の背景を振り返り、試作を重ねることで色での表現が乏しいという課題を解決した。このことから、生徒自身も自分と向き合うだけでなく、他者はどの様に色彩を捉えているのかという視点も取り入れることで、色彩への気付きが生まれるのではないかと考える。

参考・引用文献：

- (1) André Derain, "Pont de Charing Cross", 1906, Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt, 2024-01-24, <https://www.musee-orsay.fr/fr/oeuvres/pont-de-charing-cross-10872>, (閲覧日 2025-01-30) .
- (2) 京都市立芸術大学美術教育研究会, 茨城県造形教育協会編, 『美術資料』, 株式会社秀学社, p.4-8.
- (3) 島田紀夫・千足伸行編, 『New History of World Art 25 世界美術大全集 第25巻 フォーヴィスムとエコール・ド・パリ』, 小学館, 1994, p.92.
- (4) 内閣府認定公益財団法人色彩検定協会編, 『文部科学省後援 色彩検定 公式テキスト 1級編』, 内閣府認定公益財団法人色彩検定協会, 2020, p.82.
- (5) 内閣府認定公益財団法人色彩検定協会編, 『文部科学省後援 色彩検定 公式テキスト 3級編』, 内閣府認定公益財団法人色彩検定協会, 2019, p.47, p.103.
- (6) 早坂優子, 『巨匠に教わる 絵画の見かた』, 株式会社視覚デザイン研究所, 1996, p.131.
- (7) 村上尚徳, 他, 『美術1 美術との出会い』, 日本文教出版株式会社, 2022, p.70-72.
- (8) 村上尚徳, 他, 『美術2・3 上学びの実感と広がり』, 日本文教出版株式会社, 2022, p.64-65.
- (10) 文部科学省, 『中学校学習指導要(平成29年度告示)解説 美術編』, 日本文教出版株式会社, 2018, p.11.